

日野川流域の林業に関わる団体・事業所関係者より新年のご挨拶を頂きました
寄稿頂きました皆様、ありがとうございました。

里山と林業

日南町町長 増原 聡

かつては、地域に共同の草刈場や共有山があり、刈り取った草を水田の肥料としたり、マキや小枝を集めて燃料にしたり、カヤは家屋の屋根材として、ワラビやゼンマイなどの山菜を採取する場所であったり、多くの恵みをもたらす場所でした。山と人々の暮らす里との境界、緩衝地帯の役割を果たしていた場所でもありましたが、今はその機能も失われ、人家のすぐそばにイノシシなどの有害鳥獣が出没することも珍しいことではなくなりました。



里山を利用した都市と地域の交流事業や、スローライフを求めての移住や、農業・林業へ魅力を感じ定住する若者の増加などがメディアで紹介され中山間地に対する意識も変わってきています。

日南町でも近頃は、農業研修生、林業研修生という形で町内に移住される方が増え、まち協や自治会の活動でお目にかかったりします。他の地域で永年お勤めをされていた方が、日南町で暮らすことを考えられたり、空き家になっていた家を修理して住みたいという声を聞いたりすると、一朝一夕に人口が増えるということではないのですが、日南町で暮らしてみたいという方は増えているように思います。

一方で、山林については遠方にお住まいで山林の管理ができないので処分したいといった話も聞きます。

里山の風景や、林業の様子も大きく変わってきていますが、木の成長は昔と同じようにゆっくりで、植林、間伐、皆伐という木材のサイクルが一回りするには、50年から60年という時間が必要で、木を植えてから親、子、孫と数世代の時間や労力をかけ木材が育っていきます。

現在ある森林は先達たちの努力で築かれた財産であり、今後も残すべき宝であると思います。

林業の施業方法も高性能機械で路網の整備、伐採や集材を行うように変わり、木材加工も新しい工場が新設されたりしていますが、林業事業者だけでなく、山林所有者の方やその地域で暮らす方、森林に関わるすべての方の課題として行政も含めて、今後の林業を考えていく必要があります。